

第1章 中学生・高校生の社会認識

—現状批判的認識から「共生」に関わる問題認識へ—

飯田 浩之

1. はじめに

本章において特に着目するのは、中高生が現在の日本の社会をどのように認識しているかである。現状に「幸せ」を感じる中高生が増えているとの調査結果がある。周囲と協調して生きる生き方が主流になりつつあるとも言われている（NHK放送文化研究所，2013）。社会に批判的であるよりも肯定的であることが目立つなかで、中高生の共生についての問題認識も後退してしまうのか。「共生」が、共生ならざる事象の解消を目指すプロセスであるとしたら、直接、その解消に取り組まなくとも、最低限、共生に関わる問題を認識していることが必要である。どこにどのような問題が存在するのか、その点について確と認識していることが、「プロセスとしての共生」の前提である。日々、現状を当たり前のものとしてそのまま受け入れていたら、問題の認識には至らない。問題を認識するためにも現状に対する批判的な視座は、是非とも確保しておきたいところである。果たして現状に対する批判的な認識は、中高生の共生に関わる問題認識に繋がっているのか。繋がっているとしたら、どのような点においてであるのか。中高生が社会の現状に対して肯定的になりつつあるなかで、「プロセスとしての共生」の可能性を求めて敢えて彼ら／彼女らの批判的な認識の必要性を説く以上、この点を実証的に明らかにしておく必要がある。

このような問題意識のもとに本章では、次の点を明らかにする。

- ① 中高生の「共生」に関わる「社会認識」の実態
- ② 「社会認識」における現状批判的傾向の様相
- ③ 「社会認識」における現状批判的傾向と共生に関わる「問題認識」との関連—現状に対する批判的認識が問題の認識に繋がるかどうかの検証—
- ④ 「問題認識」に繋がる批判的視座の探索—何が「問題認識」の契機かについての検討—

2. 中高生の「共生」に関わる社会認識

まず、中高生の社会認識について、その概要を見ておくことにする。

調査では、共生の観点から設定した現在の日本の社会のありようについて、中高生がそれをどのように見ているかを尋ねている。表1は、その単純集計結果であり、表2は、結果を「肯定的」（「そう思う」または「まあそう思う」に答えた生徒の割合）と「批判的」（「そう思わない」または「あまりそう思わない」に答えた生徒の割合）に整理し直したもので

ある。

これを見ると、「若者が暮らしやすい社会」だと思っている中高生は8割に及んでいる(81.6%)。「そう思う」(33.3%)よりも「まあそう思う」(48.2%)という生徒の方が多ものの、現在の日本の社会は自分たち若者の暮らす社会として肯定できるものようである。更に、「外国人」(65.1%)や「高齢者」(61.3%)にとって「暮らしやすい」とする中高生も6割を越えている。こちらの方は、「まあそう思う」という生徒が多く(52.8%/47.7%)、「そう思う」生徒の割合は1割程度であるところから(13.6%/12.3%)、やや厳しい評価となっている。「女性が働きやすい社会」(61.1%)、「安心・安全に暮らせる社会」(60.3%)、「人々が助け合って生きている社会」(57.5%)だとする中高生も6割前後である。

一方、中高生が疑問を呈しているのは、現在の日本の社会が「子どもの意見が取り入れられやすい社会」「誰もが同じくらいに豊かに過ごせる社会」「どこに住んでも同じように暮らせる社会」「性的マイノリティの人が暮らしやすい社会」であるかどうかである。そうした社会に「なっていない」、すなわち「そう思わない」生徒の割合は8割前後に及んでいる(81.6%/80.2%/79.7%/77.4%)。子どもや性的マイノリティが無視・排除されたり、皆が同じように暮らすことができず、そこに偏差や格差が見られたりすることでもって、中高生は現状批判的である。

では、このような傾向は、いまいし詳細に見ると、どのような様相を呈しているのか。

表1 中高生の「共生」に関わる社会認識(全体/N=1,095)

(%)

	そう思う	まあ そう思う	あまり そう思わ ない	そう思わ ない	無回答
01. 女性が働きやすい社会だ	11.3	49.8	32.1	6.0	0.7
02. 性的マイノリティの人が暮らしやすい社会だ	2.7	19.1	52.0	25.5	0.7
03. 障害のある人が暮らしやすい社会だ	5.8	37.9	45.2	10.6	0.5
04. 高齢者が暮らしやすい社会だ	13.6	47.7	31.1	6.9	0.6
05. 若者が暮らしやすい社会だ	33.3	48.2	13.4	4.6	0.5
06. 外国人が暮らしやすい社会だ	12.3	52.8	29.4	4.7	0.8
07. 人々の意見や行動が大切にされる社会だ	9.2	33.0	43.4	14.1	0.4
08. 子どもの意見が取り入れられやすい社会だ	4.0	13.9	54.3	27.3	0.5
10. 子育てをしやすい社会だ	7.6	37.0	43.7	11.1	0.7
11. 誰もが同じくらいに豊かに暮らせる社会だ	3.6	15.9	43.7	36.4	0.4
12. どこに住んでも同じように暮らせる社会だ	4.3	15.5	42.2	37.5	0.5
13. 安全・安心に暮らせる社会だ	18.4	41.8	26.2	13.0	0.5
14. 人々が助け合って生きている社会だ	11.6	45.9	30.6	11.3	0.5

注) 「09. 学歴がものをいう社会だ」は除外

表2 中高生の「共生」に関わる社会認識
 (現状肯定的な生徒と現状批判的な生徒の割合/全体/N=1,095) (%)

	肯定的な生徒 「そう思う」	批判的な生徒 「そう思わない」	無回答
05. 若者が暮らしやすい社会	81.6	18.0	0.5
06. 外国人が暮らしやすい社会	65.1	34.1	0.8
04. 高齢者が暮らしやすい社会	61.3	38.1	0.6
01. 女性が働きやすい社会	61.1	38.2	0.7
13. 安全・安心に暮らせる社会	60.3	39.2	0.5
14. 人々が助け合って生きている社会	57.5	41.9	0.5
10. 子育てをしやすい社会	44.6	54.7	0.7
03. 障害のある人が暮らしやすい社会	43.7	55.8	0.5
07. 人々の意見や行動が大切にされる社会	42.2	57.4	0.4
02. 性的マイノリティの人が暮らしやすい社会	21.8	77.4	0.7
12. どこに住んでも同じように暮らせる社会	19.8	79.7	0.5
11. 誰もが同じくらいに豊かに暮らせる社会	19.5	80.2	0.4
08. 子どもの意見が取り入れられやすい社会	17.9	81.6	0.5

注) 現状肯定的な生徒「そう思う」：「そう思う」と「まあそう思う」に答えた生徒
 現状批判的な生徒「そう思わない」：「そう思わない」「あまりそう思わない」に答えた生徒
 「09. 学歴がものをいう社会」は除外

3. 現状批判的傾向の強さと基軸

先にも述べたように、本章で目に止めているのは、中高生の現状批判的な社会認識である。ここからは、特に、中高生の「社会認識」における現状批判的傾向を取り上げ、その実際を見ていくこととする。

表3は、表1でみた中高生の「社会認識」の現状を、その批判的傾向に目を止めつつ、加重平均の値で示したものである。すなわち、各質問項目における回答について、「そう思わない」を4点、「あまりそう思わない」を3点、「まあそう思う」を2点、「そう思う」を1点として数値化したものである。なお、「9. 学歴がものをいう社会」については、他の項目との性格の違いを考慮して処理から除外した（以下、この項目については、すべて除外して分析を進めていく）。

表を見ると、「割合」で見た結果（表1）と同様の結果が示されている。批判的傾向が見て取れるのは、「どこに住んでも同じように暮らせる社会」かどうか（3.13）、「誰もが同じくらいに豊かに過ごせる社会」（3.13）かどうかについてである。現在の日本の社会が偏差・格差を含んだ社会であることにおいて、中高生たちは批判的傾向を示している。更に、「子どもの意見が取り入れられやすい社会」（3.05）、「性的マイノリティの人が暮らしやすい社会」（3.01）かどうかについても批判的である。現在の日本の社会は「人々の意見や行動が大切にされる社会」（2.63）ではない、という見方もややなされる傾向にあり、排他的であることをもって社会を批判的に見る傾向も見て取れる。

では、このような傾向は、性別、学校段階別にみると、どのような様相を呈しているのか。表－４は、現状批判的傾向の強さを性別、学校段階別に見たものである。大雑把に見て、男子よりも女子、中学生よりも高校生が、より、批判的である。

表３ 中高生の「共生」に関わる社会認識
(現状批判的な傾向の強さ／加重平均／全体)

次のような社会だと「思わない」	加重平均	標準偏差
12. どこに住んでも同じように暮らせる社会 (N=1,090)	3.13	0.83
11. 誰もが同じくらいに豊かに暮らせる社会 (N=1,091)	3.13	0.81
08. 子どもの意見が取り入れられやすい社会 (N=1,090)	3.05	0.76
02. 性的マイノリティの人が暮らしやすい社会 (N=1,087)	3.01	0.75
07. 人々の意見や行動が大切にされる社会 (N=1,091)	2.63	0.84
03. 障害のある人が暮らしやすい社会 (N=1,089)	2.61	0.75
10. 子育てをしやすい社会 (N=1,087)	2.59	0.79
14. 人々が助け合って生きている社会 (N=1,089)	2.42	0.84
13. 安全・安心に暮らせる社会 (N=1,089)	2.34	0.93
01. 女性が働きやすい社会 (N=1,087)	2.33	0.76
04. 高齢者が暮らしやすい社会 (N=1,088)	2.32	0.79
06. 外国人が暮らしやすい社会 (N=1,086)	2.27	0.73
05. 若者が暮らしやすい社会 (N=1,090)	1.89	0.80

注) 現状批判的な傾向の強さ(加重平均) : 「そう思わない」=4, 「あまりそう思わない」=3, 「まあそう思う」=2, 「そう思う」=1
「09. 学歴がものをいう社会だ」は除外

表４ 中高生の「共生」に関わる社会認識
(現状批判的傾向の強さ／加重平均／全体, 基本属性別)

次のような社会だと「思わない」	全体	性別		学校段階	
		男子	女子	中学生	高校生
12. どこに住んでも同じように暮らせる社会	3.13	3.11	3.16	3.13	3.14
11. 誰もが同じくらいに豊かに暮らせる社会	3.13	3.12	3.15	3.09	3.16
08. 子どもの意見が取り入れられやすい社会	3.05	3.07	3.05	3.02	3.08
02. 性的マイノリティの人が暮らしやすい社会	3.01	2.99	3.03	3.01	3.01
07. 人々の意見や行動が大切にされる社会	2.63	2.61	2.64	2.56	2.67
03. 障害のある人が暮らしやすい社会	2.61	2.58	2.64	2.62	2.61
10. 子育てをしやすい社会	2.59	2.54	2.62	2.45	2.67
14. 人々が助け合って生きている社会	2.42	2.39	2.44	2.36	2.45
13. 安全・安心に暮らせる社会	2.34	2.31	2.36	2.47	2.26
01. 女性が働きやすい社会	2.33	2.26	2.40	2.35	2.32
04. 高齢者が暮らしやすい社会	2.32	2.25	2.38	2.34	2.30
06. 外国人が暮らしやすい社会	2.27	2.28	2.25	2.20	2.31
05. 若者が暮らしやすい社会	1.89	1.93	1.84	1.74	1.99

注) 現状批判的傾向の強さ(加重平均) : 「そう思わない」=4, 「あまりそう思わない」=3, 「まあそう思う」=2, 「そう思う」=1
「09. 学歴がものをいう社会だ」は除外

まず、性別で見ると、13項目中10項目で男子よりも女子がより批判的な傾向を示している。特に「子育てをしやすい社会」だったり「女性が働きやすい社会」だったり、女子に関わる事柄について、女子は、より批判的である。

学校段階別に見ると、13項目中8項目において中学生よりも高校生の方が批判的傾向を示している。中学生と高校生とで特に違いが見られるのは「若者が暮らしやすい社会」「子育てをしやすい社会」かどうかである。この2項目については、高校生で批判的傾向が相対的に強くなっている。一方、中学生の場合には、「安心・安全に暮らせる社会」かどうかで、高校生よりも現状批判的である。

参考までに加重平均ではなく、「現状批判的な生徒の割合」（「そう思わない」「あまり思わない」とする生徒の割合）で見た場合の結果を表5に示しておく。

表5 中高生の「共生」に関わる社会認識
（現状批判的な生徒の割合／全体，基本属性別）

(%)

次のような社会だと「思わない」	全体 (N=1,095)	性別		学校段階	
		男子 (N= 533)	女子 (N= 544)	中学生 (N= 420)	高校生 (N= 675)
08. 子どもの意見が取り入れられやすい社会	81.6	80.9	82.9	77.4	84.3
11. 誰もが同じくらいに豊かに暮らせる社会	80.2	78.2	82.4	77.6	81.8
12. どこに住んでも同じように暮らせる社会	79.7	78.0	81.6	79.3	80.0
02. 性的マイノリティの人が暮らしやすい社会	77.4	74.5	80.3	77.6	77.3
07. 人々の意見や行動が大切にされる社会	57.4	56.1	58.6	55.5	58.7
03. 障害のある人が暮らしやすい社会	55.8	51.6	59.9	55.5	56.0
10. 子育てをしやすい社会	54.7	51.6	57.7	46.2	60.0
14. 人々が助け合って生きている社会	41.9	40.9	42.6	39.0	43.7
13. 安全・安心に暮らせる社会だ	39.2	38.6	38.6	47.1	34.2
01. 女性が働きやすい社会	38.2	34.5	41.9	39.8	37.2
04. 高齢者が暮らしやすい社会	38.1	34.7	41.2	41.0	36.9
06. 外国人が暮らしやすい社会	34.1	34.5	33.5	31.2	35.9
05. 若者が暮らしやすい社会	18.0	20.3	15.3	14.0	20.4

注) 現状批判的な生徒：「そう思わない」「あまりそう思わない」に答えた生徒
「09. 学歴がものをいう社会だ」は除外

ところで、中高生の「社会認識」における現状批判的な傾向を総合的に捉えるとどのようなことが言えるのか。ここでは批判的な傾向の強さについて総合的な尺度を作ることでそれを見てみたい。

尺度の作り方は、至って単純である。上記で個別にみた13の項目についてそれぞれ「そう思わない」を4点、「あまり思わない」を3点、「まあ、そう思う」を2点、「そう思う」を1点とし、13の項目を足し合わせると、最小13点、最大52点の合成尺度を作ることが可能である。言うまでもなく、この値が高いほど、現状の社会に批判的だということにな

る。

表6は、このようにして作成した尺度を使って中高生の現状批判的傾向の強さを性別、学校段階別、学校段階・性別に見たものである。値は、それぞれのカテゴリーにおける平均値である。

この結果でも、先に表4（あるいは表5）で見た結果が確認できる。すなわち、男子よりも女子の方が、中学生よりも高校生の方が現在の日本の社会により批判的である。学校段階・性別に見た場合には、高校生の女子が最も批判的である。現状をよしとせず、それに疑問を呈しているのは、高校生の女子だという結果である。

ただ、とは言うものの、値を見ると、男子と女子、中学生と高校生とでさほど大きく異なっていない。検定を行ってはいないが、現在の日本の社会に対する見方に性や学校段階による違いはあまりないものと思われる。

なお、中学生よりも高校生において標準偏差の値が小さくなっている。相対的にはあるが、中学生よりも高校生で社会を批判的に見る見方のばらつきが少なくなっている。

表6 中高生の「共生」に関わる社会認識
(現状批判的傾向の強さ・総合／加重平均／基本属性別)

			平均値	標準偏差	
全体		(N=1,070)	33.72	6.21	
性別	男子	(N= 519)	33.49	6.68	
	女子	(N= 535)	33.93	5.63	
	無回答	(N= 16)	34.25	8.79	
学校段階別	中学生	(N= 405)	33.33	6.92	
	高校生	(N= 665)	33.96	5.74	
学校段階	中学生	男子	(N= 218)	33.32	7.58
		女子	(N= 182)	33.31	6.05
		無回答	(N= 5)	34.40	7.64
	高校生	男子	(N= 301)	33.62	5.96
		女子	(N= 353)	34.25	5.38
		無回答	(N= 11)	34.18	9.62

では、中高生の社会認識における現状批判は、現在の日本の社会のどのような側面に向けられたものなのか。換言すれば、中高生の現状批判の基軸となっているのは何か。表7は、社会認識に関する13の質問に対する回答に因子分析を施した結果である。「思わない」という回答に大きな値を付与しているので（「そう思わない」4点、「あまりそう思わない」3点、「まあ、そう思う」2点、「そう思う」1点）、析出された因子は現状批判の基軸を示すものとなっている。主因子法を用いて直交回転をしているものの複数の因子で因子負荷量が高くなっている項目があり、必ずしも結果は明確でないが、各因子を構成する項目をもとに因子の意味するところを解釈していくと、第1因子では因子負荷量が高い項目とし

で「障害のある人が暮らしやすい社会（でない）」、「性的マイノリティの人が暮らしやすい社会（でない）」、「女性が働きやすい社会（でない）」、「子育てをしやすい社会（でない）」、「外国人が暮らしやすい社会（でない）」といった項目が並んでいる。これらの項目からイメージされるのは平たく言えば「やさしくない社会」－きめ細かな配慮に欠ける社会である。中高生の社会認識における現状批判的傾向は、まずは、現在の日本の社会における「配慮性の欠如」に向けられていると言ってよいものと思われる。

第2因子で因子負荷量が高いのは、「誰もが同じくらいに豊かに暮らせる社会（でない）」、「どこに住んでも同じように暮らせる社会（でない）」の2項目である。この2項目は、人々の暮らしに格差や偏差があることの認識であり、その点でこの因子は現在の日本の社会における「平等性の欠如」を突いた因子だと判断できる。平たく言えば「等しくない社会」であることの指摘である。

第3因子は、「安全・安心に暮らせる社会（でない）」、「人々が助け合って生きている社会（でない）」の2項目で因子負荷量が高くなっている。この2項目からイメージされるのは「やすらぎのない社会」である。社会の「安定性の欠如」に向けられた批判がこの因子の意味するところであろう。

表7 中高生の「共生」に関わる社会認識－現状批判的傾向－
(因子分析結果／全体)

	第1因子	第2因子	第3因子
	配慮性の欠如 やさしくない 社会	平等性の欠如 等しくない 社会	安定性の欠如 やすらぎのない 社会
03. 障害のある人が暮らしやすい社会（でない）	0.598	0.149	0.278
02. 性的マイノリティの人が暮らしやすい社会（でない）	0.553	0.210	-0.037
01. 女性が働きやすい社会（でない）	0.547	0.130	0.095
10. 子育てをしやすい社会（でない）	0.545	0.294	0.167
06. 外国人が暮らしやすい社会（でない）	0.531	0.025	0.345
08. 子どもの意見が取り入れられやすい社会（でない）	0.504	0.388	0.114
07. 人々の意見や行動が大切にされる社会（でない）	0.502	0.260	0.280
04. 高齢者が暮らしやすい社会（でない）	0.445	0.082	0.375
05. 若者が暮らしやすい社会（でない）	0.389	-0.022	0.300
11. 誰もが同じくらいに豊かに暮らせる社会（でない）	0.214	0.807	0.192
12. どこに住んでも同じように暮らせる社会（でない）	0.160	0.761	0.218
13. 安全・安心に暮らせる社会（でない）	0.060	0.259	0.579
14. 人々が助け合って生きている社会（でない）	0.291	0.306	0.527
寄与率(%)	19.67	13.75	9.65

注) 主因子法／バリマックス回転
「09. 学歴がものをいう社会だ」は除外

以上、見てきたように、中高生の社会に対する現状批判は、「配慮性の欠如に対する批判」「平等性の欠如に対する批判」「安定性の欠如に対する批判」の3基軸に整理できる。彼ら／彼女らの批判は、現在の日本の社会が「やさしくない社会」であったり、「等しくない社会」であったり、「やすらぎのない社会」であったりすることに向けられているのである。

参考までに、上述の各因子の因子得点の平均を、性別、学校段階別、学校段階・性別に算出した結果を表8として掲げておく。「やさしくない社会」という批判は、男子よりも女子、中学生よりも高校生に顕著であり、特に高校生の女子において目立っている。「等しくない社会」という批判については、中学生では女子に、高校生では男子に顕著である。「やすらぎのない社会」という批判については、性や学校段階による違いはあまり見られない。

表8 中高生の「共生」に関わる社会認識—現状批判的傾向の強さ・下位3傾向—
(因子得点の平均／基本属性別)

		第1因子	第2因子	第3因子	
		配慮性の欠如 に対する批判 (やさしくない社会)	平等性の欠如 に対する批判 (等しくない社会)	安定性の欠如 に対する批判 (やすらぎのない社会)	
性別	男子 (N= 519)	-0.030	-0.008	-0.015	
	女子 (N= 535)	0.028	0.014	0.008	
	無回答 (N= 16)	0.019	-0.191	0.243	
学校段階別	中学生 (N= 405)	-0.091	-0.012	0.014	
	高校生 (N= 665)	0.055	0.008	-0.009	
学校段階・性別	中学生	男子 (N= 218)	-0.052	-0.092	0.027
		女子 (N= 182)	-0.138	0.093	-0.016
		無回答 (N= 5)	-0.065	-0.352	0.573
	高校生	男子 (N= 301)	-0.014	0.053	-0.046
		女子 (N= 353)	0.114	-0.027	0.020
		無回答 (N= 11)	0.058	-0.118	0.092

注) 各因子の因子得点

4. 現状批判から「共生」に関わる問題認識へ

本章の主眼は、中高生の現状批判的な社会認識と「共生」に関わる問題認識の関係を探ることである。この関係を見るまえに、中高生の「共生」に関わる問題認識について概観しておこう。

調査では、「若者や高齢者といった世代の違い」、「男性や女性といった性別の違い」、「体や心の障害があるかないかの違い」など「共生」に関わりのある10の「違い」をあげ、そのなかから「社会で問題となりうる違い」を選んでもらっている。「社会で問題となりうる」という尋ね方は、自身との間に、若干、距離を置いたところで問題の認識を尋ねており、しかも、可能性を問うている点で実際に生起している問題についての認識ではない、という限界があるが、この研究では、この問いへの回答をもって「中高生の『共生』に関わる

問題認識」と見なしている。

表9は、この問いについての単純集計（全体）及び性別、学校段階別の結果である。表10は、いま少し詳細に学校段階・性別に見た結果である。複数回答であるので、値は、各項目において「社会で問題となりうる」と答えた生徒の割合を示している。

表9 中高生の「共生」に関わる問題認識－「社会で問題となりうる」と思う「違い」－
（全体、性別、学校段階別／複数回答）

	全体 (N=1,095)	性別			学校段階別	
		男子 (N=533)	女子 (N=544)	無回答 (N=18)	中学生 (N=420)	高校生 (N=675)
03. 体や心の障害があるかないかの違い	65.0	61.9	68.2	61.1	66.2	64.3
06. 経済的な豊かさの違い	56.9	57.4	56.4	55.6	48.8	61.9
01. 若者や高齢者といった世代の違い	49.3	52.9	46.0	44.4	50.7	48.4
09. 信じている教えや宗教の違い	42.4	45.6	39.3	38.9	41.0	43.3
10. 人種や国籍の違い	41.8	44.1	39.7	38.9	45.5	39.6
05. 学歴の違い	39.4	42.0	36.2	55.6	43.8	36.6
08. 政治についての考え方の違い	34.9	39.0	31.1	27.8	38.6	32.6
07. 労働形態の違い	31.6	32.6	30.1	44.4	29.5	32.9
02. 男性や女性といった性別の違い	30.3	30.8	29.6	38.9	29.3	31.0
04. 生まれた地域や住んでいる地域の違い	19.5	23.6	15.4	16.7	21.4	18.2
11. この中に、問題となりうると思うものはない	3.7	3.6	3.7	11.1	5.2	2.8
12. NA	1.8	2.3	1.5	0.0	2.6	1.3

注) 「社会で問題となりうる」とする生徒の割合

表10 中高生の「共生」に関わる問題認識－「社会で問題となりうる」と思う「違い」－
（全体、学校段階・性別／複数回答）

	全体 (N=1,095)	中学生			高校生		
		男子 (N=226)	女子 (N=187)	無回答 (N=7)	男子 (N=307)	女子 (N=357)	無回答 (N=11)
03. 体や心の障害があるかないかの違い	65.0	62.8	70.1	71.4	61.2	67.2	54.5
06. 経済的な豊かさの違い	56.9	50.4	47.1	42.9	62.5	61.3	63.6
01. 若者や高齢者といった世代の違い	49.3	53.1	47.1	71.4	52.8	45.4	27.3
09. 信じている教えや宗教の違い	42.4	41.6	40.6	28.6	48.5	38.7	45.5
10. 人種や国籍の違い	41.8	46.5	44.4	42.9	42.3	37.3	36.4
05. 学歴の違い	39.4	44.2	43.3	42.9	40.4	32.5	63.6
08. 政治についての考え方の違い	34.9	39.8	36.9	42.9	38.4	28.0	18.2
07. 労働形態の違い	31.6	29.2	29.4	42.9	35.2	30.5	45.5
02. 男性や女性といった性別の違い	30.3	29.2	28.3	57.1	31.9	30.3	27.3
04. 生まれた地域や住んでいる地域の違い	19.5	23.9	18.7	14.3	23.5	13.7	18.2
11. この中に、問題となりうると思うものはない	3.7	4.4	5.9	14.3	2.9	2.5	9.1
12. NA	1.8	3.5	1.6	0.0	1.3	1.4	0.0

注) 「社会で問題となりうる」とする生徒の割合

これを見ると、多くの生徒の「共生」に関わる問題認識は、「体や心の障害があるかないかの違い」に向けられている。その次が「経済的な豊かさの違い」である。共に選択している生徒の割合が5割を超えている（65.0%/56.9%）。「若者や高齢者といった世代の違い」を問題として認識している生徒の割合も高く、5割弱（49.3%）である。逆に、「生まれた地域や住んでいる地域の違い」は、選択している生徒の割合が2割（19.5%）であり、あまり、問題として認識されていない。

表10で、学校段階と性によって問題認識の持ち方がどのように異なるかを見ておくと、中学生の場合、女子よりも男子で問題認識が多岐に渡っていることがわかる。多くの項目において「社会で問題となりうる」と見る傾向にある。男子よりも女子で問題として認識される傾向にあるのは「体や心の障害があるかないかの違い」くらいである。

高校生の場合にも、概ね、同様の傾向が見て取れる。中学生の場合と異なるのは、男女の違いが、より、明確なことである。特に「政治についての考え方の違い」や「信じている教えや宗教の違い」、「生まれた地域や住んでいる地域の違い」などマクロな次元における「違い」について、男子で「問題となりうる」とする傾向が強くなっている。女子に比べて男子の方が、「問題」を大きな文脈でもって把握、認識しているという結果である。

以上、見てきたように本章では「社会で問題となりうる」と思う「違い」について問うことによって中高生の問題認識に迫ろうとしているのであるが、この問いに対して中高生が選択する項目（＝「違い」）の数は、言うなれば、彼ら／彼女らの問題認識の広がり・高まりを示している。そこで、選択された項目の数に着目して、中高生の問題認識の広がり・高まりを把握しておきたい。

表11は、選択項目数の平均を、性別、学校段階別、学校段階・性別に見たものである。中高生全体では、平均して10項目中4項目（4.19）が選択されている。男女別では、女子（3.98）よりも男子（4.40）において選択項目数が多くなっている。先にも見たように、女子よりも男子の問題意識の方が多岐に渡っているのである。学校段階別では、数値上は中学生の方が高くなっているが、その差はわずかである。学校段階と性別を絡めて見ると、高校生の男子の問題認識の広がり、高まりが目立っている。逆に、高校生の女子の場合には、中学生よりも選択項目数が少なく、問題認識の広がり、高まりは限定的である。調査の対象となっている高等学校は、生徒の学力が高い学校なのであるが、「共生」に関わる問題認識においては、特に女子において広がり・高まりに欠ける傾向を示しているのである。

では、懸案の社会認識と問題認識との関係は、どうであるのか。中高生の社会に対する現状批判的認識は、「共生」に関わる問題認識を広げ、高める可能性を帯びているのか。

表12は、中高生の現状批判的傾向の強さと「共生」に関わる問題認識との関係を見たものである。この表に示した「現状批判的傾向の強さ」とは、社会認識を尋ねた13項目についての回答を合成して作成した尺度に基づいている。すなわち、尺度の得点を用いて中高生を3群に分け、得点の低い方から批判的傾向の「弱群」「中群」「高群」としたものであ

る。一方、「問題認識」として示したのは、社会で「問題となりうる」と思う「違い」として選択された項目数である。表に示したのは選択された項目数の平均であるが、その数は「高群」「中群」「弱群」の順に多くなっている。現状批判的傾向の強い生徒において多くの項目を選択する傾向にあり、その点で社会の現状に批判的であることが、「共生」に関わる問題認識を広げ、高めることに関連していると思われるのである。

表 11 中高生の「共生」に関わる問題認識－「社会で問題となりうる」と思う「違い」－
(選択項目数／全体, 基本属性別)

		平均 (項目)	標準偏差	
全体 (N=1,075)		4.19	2.40	
性別	男子 (N= 521)	4.40	2.59	
	女子 (N= 536)	3.98	2.15	
	無回答 (N= 18)	4.22	3.12	
学校段階別	中学生 (N= 409)	4.26	2.44	
	高校生 (N= 666)	4.14	2.37	
学校段階・性別	中学生	男子 (N= 218)	4.36	2.58
		女子 (N= 184)	4.12	2.25
		無回答 (N= 7)	4.57	3.10
	高校生	男子 (N= 303)	4.43	2.61
		女子 (N= 352)	3.90	2.09
		無回答 (N= 11)	4.00	3.26

注) 10項目中, 選択された項目の数

表 12 中高生の「共生」に関わる問題認識－「社会で問題となりうる」と思う「違い」－
(選択項目数／社会認識－現状批判的傾向の強さ・総合3群別)

		平均 (項目)	標準偏差
全体 (N=1,053)		4.20	2.41
現状批判的 傾向の強さ (総合)	弱群 (13~31点) (N= 372)	3.83	2.08
	中群 (32~36点) (N= 369)	4.14	2.37
	強群 (37~52点) (N= 312)	4.71	2.71

注) 10項目中, 選択された項目の数

なお、表 13 は、「現状批判的傾向の強さ」を示す尺度の得点と「問題となりうる」として選択された項目数の相関を見たものである。係数は 0.176 とそれほど高くないが、統計的には有意な結果となっている。中高生が社会で生起する「共生」に関わる問題に目を止める条件の一つとして、現状に批判的であることがあげられるものと思われる。

表 13 社会認識における批判的傾向の強さと問題認識の広がり・高まりとの関係
(Pearson 相関係数)

		問題認識	
		「社会で問題となりうる」と思う「違い」 (選択項目数)	
社会認識	批判的傾向の強さ (総合)	度数	1,075
		相関係数	0.176 **
		有意確率	0.000

注) ** 1%水準で有意

では、社会のどのような側面に批判的であることが、「共生」に関わる問題認識に繋がるのか。先に見たように中高生の現状批判的認識は、「配慮性の欠如に対する批判」「平等性の欠如に対する批判」「安定性の欠如に対する批判」の3基軸に整理できた。この3基軸を手がかりに、問題認識に繋がり得る批判的認識を探ったのが表14である。すなわち、それぞれの基軸(因子)の因子得点をもとに中高生を「弱群」「中群」「高群」の3群にわけ、それぞれ、3群ごとに社会で「問題となりうる」と思う「違い」として選択された項目数の平均を算出、その値を示したものである。この表をみると、社会認識の3基軸のうち、問題認識との間で最もはっきりした関係が見て取れるのは「平等性の欠如に対する批判」である。批判的傾向が強いほど、問題となりうると思う「違い」としてあげる項目の数が多くなっている。次に関係が見て取れるのが、「配慮性の欠如に対する批判」である。「安定性の欠如に対する批判」については、ほとんど関係が見て取れない。

表 14 問題認識の強さ・広がりー「社会で問題となりうる」と思う「違い」ー
(選択項目数／「共生」に関わる社会認識ー現状批判的傾向の強さ・下位3傾向3群別)

		平均 (項目)	標準偏差
全体 (N=1,053)		4.20	2.407
配慮性の欠如に対する 批判(やさしくない社会)	弱群 (N= 353)	3.89	2.192
	中群 (N= 355)	4.09	2.219
	強群 (N= 345)	4.63	2.726
平等性の欠如に対する 批判(等しくない社会)	弱群 (N= 348)	3.70	2.397
	中群 (N= 352)	4.16	2.271
	強群 (N= 353)	4.73	2.444
安定性の欠如に対する 批判(安らぎのない社会)	弱群 (N= 352)	4.21	2.251
	中群 (N= 353)	3.91	2.233
	強群 (N= 348)	4.48	2.686

注) 10項目中、選択された項目の数

表 15 は、この関係を、社会認識の各因子（基軸）の因子得点と問題認識の選択項目数との相関で示したものである。係数の大きさは「平等性の欠如に対する批判」(0.189)、「配慮性の欠如に対する批判」(0.117)、「安定性の欠如に対する批判」(0.037)の順になっており、前二者が統計的に有意である。これをみても、中高生にあっては、現在の日本社会に「平等性」「配慮性」が欠けているという認識が、「共生」に関わる問題認識を広げたり、高めたりすることに繋がっているものと推測される。社会に対する批判的な視座からそれが「等しくない社会」であったり、「やさしくない社会」であったりすることに目を止めることが、「共生」について考えることに繋がっていくものと思われるのである。

表 15 社会認識における批判的傾向の強さと問題認識の広がり・高まりとの関係
(Pearson 相関係数／問題認識下位 3 傾向)

		問題認識		
		「社会で問題となりうる」と思う 「違い」 (選択項目数)		
		度数	相関係数	有意確率
社会認識 批判的傾向の強さ	配慮性の欠如に対する批判 (やさしくない社会)	1,053	0.117 **	0.000
	平等性の欠如に対する批判 (等しくない社会)	1,053	0.189 **	0.000
	安定性の欠如に対する批判 (安らぎのない社会)	1,053	0.037	0.236

注) ** 1%水準で有意

5. 結論

本章で明らかにしたのは、社会に批判的であるよりも肯定的であることが主流となるなかで、中高生たちの社会に対する批判的な認識は「共生」に関わる問題に目を止める糸口になり得るということである。取り分け、批判的な認識のうちでも、現在の日本の社会が「等しくない社会」であるという認識は、その糸口として重要な位置を占めていた。

「格差社会」といった言葉が広く使われるようになるほどに、格差の拡大が指摘されている。不平等の存在にも目が向けられ始めている。にもかかわらず、中高生たちの社会認識は肯定的な傾向を強めている。現状をよしとする認識は、そのままでは「共生」に関わる問題を見ないままに、また、見えないままに捨ておく恐れを秘めている。その結果、「共生」ならざる事象に目を止めつつ、その解消を目指す「プロセスとしての共生」の道は遠のいてしまう。「プロセスとしての共生」の道を探るのであれば、中高生の社会に対する批判的な認識に期待したいところである。現実の社会は、「等しくない社会」であったり「やさしくない社会」であったりする。ますます、そのような傾向を強めているとも見て取れる。等しくなかったり、やさしくなかったり……、社会のそのような現実を目を開かせ、社会を批判的に捉える視座を大切にすること、それは「プロセスとしての共生」を実現するための教育の課題の一つであると思われる。

【文献】

NHK 放送文化研究所（編），2013，『NHK中学生・高校生の生活と意識調査 2012 失われた20年が生んだ“幸せ”な十代』NHK 出版。